

論文

中国語と英語との色名に関する比較研究

A Comparative Research for Color Name in English and Chinese

呂 清夫 Lü Ching-fu National Taiwan Normal University,
Department of Industrial Arts Education

Abstract

In the sea of words, how can we select a group of color names to reveal the cultural condition? This is a study on the two English books: "COLOR STANDARDS AND COLOR NOMENCLATURE" and "DICTIONARY OF COLOR" to compare with "CHINESE COLOR NAME DICTIONARY" and "TRADITIONAL COLOR OF CHINA".

From these books, the difference is quite clear in the rules of choice for color name. There is a similar rule between the two English books, while one can almost find none of the same rule between the two books of Chinese color name.

It is in the same condition that the colors indicated by color names in accordance with the Nickerson's fading index. The colors represented by same color name are comparatively similar between the two English books. But the colors are comparatively different under same Chinese color name mentioned in the other two books. So, the color that indicated by color name in English is much more steady than the Chinese color name.

This research is trying to clear up conditions mentioned above and to find out the rules of choice in color name and the respective color. This should be the key point to bring about the traditional color name set.

要 旨

文字の海の中に、伝統色名セットをどのように選定すれば、代表性や普遍性のあるものになるのか。本研究では、「中国色名綜覧」¹⁾および「中国の伝統色」²⁾を、英語の「色の標準と命名法」および「色彩辞典」と比較研究を行い、調べた数字でその相違をはっきり比較させると共に、その色名選定の基準についての相違までも比較をする。そして、英語の2種類の権威的な著作の間には、その選定の基準が比較的近いため、それぞれの選定した色名が重なるものが多いのに対して、中国色名に関する2種類の著作の間には、その基準がかなり離れているため、それぞれの選定した色名が、全く別なもののように見える。

そればかりでなく、中国語並びに英語の色名が代表する色彩についても、ほぼ同じ現象が存在している。つまり、中国語と英語のそれぞれの両種類の著作にある色名の代表色を、別々にNickersonの退色指数で表示すると、英語の二つの著作にある色名の代表色は、中国色名の二つの著作にある色彩より、その安定性が比較的高い。

以上の現象の探求とその原因の究明とが本研究の要旨である。それは伝統色名セットの選定のキー・ポイントであろう。

1. 日本語、中国語、英語にある色名の比較

中国語の色名に関する著作には、「中国色名綜覧」および「中国の伝統色」が挙げられる。周知のように、前者はカラープランニングセンターの発行（1979年）であるが、その原典は中国科学院編訳出版委員会が編集した「色譜」（1959年）である。そして、後者は大日本インキ化学の発行（1986年）であるが、その原本は画家であり、北京中央美術学院の教授である王定理の研究結果である。

両者の大きな共通点は北京を中心に研究が展開されていることであるが、選定された色名には、共通点あまり見られない。「中国色名綜覧」は選定する色名が625個であり、「中国の伝統色」は320個である、両者の選定は互いに重複する同じ色名が50個しかなく（表1参照）、ほかはほとんど別々の選択基準による異なる選定である。このような状態の下では、一体どちらが中国の伝統色システムを代表するのか、という問題が残る。

日本の伝統色名で言うと、前述の「中国色名綜覧」の中にも、「日本色名索引」という530個の色名が載っているが*、これを同じ大日本インキ化学が発行した「日本の伝統色」（300個）と比べれば、両者はかなり近い基準によって色名を選定していることが分かる。なぜかと言うと、この両者の選定の間には、同じ色名が238個にのぼるからである。つまり、「日本の伝統色」では、79%の色名がその「索引」の色名と重複する。これに対して、「中国の伝統色」では、16%の色名しか、その「中国色名綜覧」の色名と重複しない。

また、英語の色名で言うと、アメリカの学者R. Ridgwayが1912年に出版した「色の標準と命名法」³⁾には、1,115個の色名が載っていたが、その後A. MaerzとM. R. Paulが1930年に共同編集した「色彩辞典」（1950年改訂再版）⁴⁾には、Ridgwayの選定した色名の40%、即ち、その451個を再収録している。つまり、両者の色名選定は、比較的に近い基準を持っている。

2. 英語の「色の標準と命名法」と「色彩辞典」との色名選定の比較

上述のことは偶然ではない。Ridgwayはアメリカの有名な鳥類学者であるが、色彩の標準化のために、出来る限り、一切の関係ある資料を集めて、色名つきの色サンプルを何千と収集してから、その一つ一つを厳しく考察した結果、選定している。例えば、商業上の色名の「ズール色」(Zulu)、「へび緑」, 「ベビー・ブルー」, 「象息」(elephant's breath), 「ばら尻灰」(ashes of rose)などが印象的で、かつ響きがよい色名であるが、意味する色彩が安定してなく、混乱を招き易いから、まず除外されている。

Ridgwayの集めた資料では1821年から1905年までの文献はかなり揃っている。これらの資料をもMaerzとPaulはその「色彩辞典」の中に全てを収録している。そして、Ridgwayの収録した色名を、改めていちいち検討したばかりでなく、ほかの学者のRidgwayに対する研究結果をも注目している。

MaerzとPaulが検討した結果、興味あるのは

表1. 日本語、中国語、英語の三組みの色名著作にある重なる色名数の比較

著作名	日本色名索引	日本の伝統色	中国色名綜覧	中国の伝統色	色の標準と命名法	色彩辞典
編集者	カラープランニングセンター	日本色研, GE企画センター	カラープランニングセンター	王定理, GE企画センター	Ridgway	MaerzとPaul
発行	同上	大日本インキ化学	同上	大日本インキ化学	同上	McGraw-Hill Book Co., Inc.
発行年	1979年	1986年	1979年	1986年	1912年	1950年
全色名数	530	300	625	320	1,115	3,467
重なる色名数	238		50		451	
色名所属	日本語		中国語		英語	

- ・「日本色名索引」は「中国色名綜覧」の中に収録したものである。
- ・重なる色名とは、各二つずつの著作にある同じの重なる色名である、重なる色名が多いほどその代表性が強いと思われる。
- ・「色彩辞典」にある全色名数や重なる色名数は1930年のリストによって統計する。なお、例えばPinkと言う色名は、「色彩辞典」の中には、6つがあったので（付いている色が6個ずつ別々であるが）、その一つしか計算しない。他の同じの場合も、この方法で統計する。

*参考文献1)の20~27ページ。

Ridgwayに除外された、おかしいと思われた色名の上述の「ズール色」から「ばら屍灰」などを、ほとんど全部を改めてその「色彩辞典」の中に収録していることである。その代わり、Ridgwayが収録した染料関係の商業色名を、逆に大量に除外している。

その収録される理由は、これらの色名が永い間に使われて、人々に受け入れられている色名の群の中に位置づけられるからである。これは習慣となって、われわれの言語の一部となる。その意味する色彩は不安定でありながら、言葉としてやはりつぎの世代によって伝えられていくからであろう。

染料の色名が除外される理由は、染料がその染めるプロセスの中で、コントロールによってどんな色相、明度と彩度の色にも仕上げる事が出来るからである。そして、ここで言う染料関係の色名と言っても、染料名と商標名(ブランド・ネーム)しかないが、それなのに、そのまま色名として使われている。それでは当然ながら、特殊な色の感じを表現することができないから、Acetin, Benzolなど12個の染料名, Aniline, Anthraceneなど10個のグループ・ネームを、更に、Benzo, Columbiaなど5個のブランド・ネームは一方向的にMaerzとPaulによって除外されている。「色彩辞典」には3,467個の色名を入れたにも拘わらず、Ridgwayの権威によって選定された色名さえ除外されているのは、その厳しさをうかがわせる。そして、その厳しさの下に、Ridgwayの色名がなお40%ほど、「色彩辞典」の色名と重複している。それと比べれば、「中国の伝統色」が、16%の色名しか「中国色名綜覧」と重複しないことは、どう説明すればよいだろうか、問題である。

3. 「中国色名綜覧」と「中国の伝統色」における色名選定の相違

本来、これは「中国の伝統色」が「中国色名綜覧」を参考にしなかったからかもしれないが、もっと根本的な原因は、両者は別々の基準によって色名を選定したためであろう。「中国色名綜覧」の原典である「色譜」の編集目的は、「生物学、鉱物学、印刷染色、絵画など各領域で使い易いために」科学出版社によって発行されている。

「色譜」によると、そのカラー・システムは、西洋の三つの研究成果を参照している。

その1は、ロシアのポンタルチャイフの「色譜」(105色、系統色名を含めれば227色)である。

その2は、本文の研究対象の「色彩辞典」(7,056色、半分位色名なし)である。

その3は、オストワルトの「色譜」(即ち、オストワルト表色系、344色)である。

その中で、オストワルト表色系がもっとも参考にされ、システム全体として、やはり8種の色系で構成されている。その色相は、オストワルトのとややずれている。システム全体の色数は重複する色を除けば、全部で1,631色であり、その上に、また625個の伝統色名を位置づけている。全体構成から見ると、なかなか合理的に組み立てられており、その設計者は厳幼芝と張兆麟である。

そして、その色名の選定は、周太玄を中心とする14人の委員の審査と制定によっているが、「色譜」によると、当時の「水生物研究所」が、一気に130個の色名を提供した。つまり、一つの来源から、五分之一以上の色名をさえも、採入れた。それでは、サンプリング(標本抽出)の方法論から見て、サンプルが集中しすぎるのではないかと懸念している。そして、「集中」すればする程、その普遍性が薄くなるのではないかと考えられている。

そのためか、「色譜」の色名選定は、「中国の伝統色」の色名と、その重複する部分が少ない。「色譜」が科学者によって編集されたのに対して、「中国の伝統色」は画家の王定理による研究結果である。後者の推薦文には、「この中国の伝統色カラーガイドは、必ずや色彩学者と美術家との歓迎を受けるものと確信している」と書いていることから、その研究する目的は、やはり、主に美術方面にあるようである。「色譜」が幅広く目指している点とやや違っているから、両者の色名選定の基準は、当然にも異っている。

著者の王氏によると、「中国の伝統色」にある色名の来源は、「本草綱目」を除けば、ほとんど美術関係の文献であり、その中で、「画家檀色」と言う本が72個の色名を収録している。したがって、サンプリングとして、やはり美術文献に集中しすぎる。特に絵画に集中しており、色彩の豊かな陶磁器の色名があまり見られない。この色名の選定基準は「色譜」とまったく違っている。こう言う状態に対して、前に述べたように、英語にある「色彩辞典」と「色の標準と命名法」とは、その色名を選定する基準が、ほぼ近いと言える。

4. 英語の色名の代表色**にある根拠

そればかりでなく、英語の両者にある色名の代表色

の中にも、中国色名より似ている色がけっこうある(表2参照)。それは、「色彩辞典」がRidgwayの引用文献をそのまま援用したばかりでなく、更に幅広く、西暦紀元前32年から1949年までの文献を大量に参考とした上に、Ridgwayの色名と色彩をいちいち厳しく検討することによって、得られた結果である。それにしても、両者の結果がやはり比較的近いのは、どういう理由であろうか。

それは、両者とも合理的に、色名の代表色を探求したからである。Ridgwayはこう言っている「……だからもし“オレンジ”、“レモン”、“栗色”、“ライラック”の色票は、精確に、特定のオレンジ、レモン、栗、ライラックなど、人々が比色するかもしれないものの色と等色できないならば、それはほかの見本と等色するであろう(実際に、それは等色している)。***

そして、「色彩辞典」のMaerzとPaulの二人が多数の文献を調べてから、あのドイツの高名な「ワーナーの色彩命名法」(Werner's Nomenclature of Colours, 1821)に対して、「Symeの役割はその偉い技術を発揮した……。今日の測定によって、彼の色票が、実際の物体に対して比色して作ることを明らかにした。****」と述べている。

あのフランスの「色彩目録」(Répertoire de Couleurs, 1905)に対しても、彼らがこう言っている、「その比色は上述の実物に対して行われている、今日のテストによって、その比色が非常に正確であることは明白である、その例外が極めて少ないから、心配する必要がない……。『色彩目録』は壮大な著作であり、今日にしても、疑いなく非常に普遍的なものであろう。*****

こういう合理的な取扱いに対して、記憶による比色や色彩命名法は、非合理的と見られる。MaerzとPaulは、「色に関して、注目に値する面白いことは、色彩が単独的に、記憶によって比色できると信じている人が多い。経験がわれわれに示したように、こ

の人々に楽まれる愚かな信念(the fond belief enjoyed by many)が真実ではないのである。†つまり、音楽家の聴覚や、お茶や酒や香水の専門家の嗅覚は、記憶を作用できるかも知れないが、色彩は具体的なものではなく、色彩の感覚がまったく別なものであり、心理的な現象であるから、わずかな条件の微妙な変化が起きても、感覚はたちまち変わってしまう。(例えば、周知の光源の違い、補色の残像、色の三要素のいずれか一つのわずかな変化などの条件である。)[誰でも、五分間の時間さえあれば、これが事実であることが実験できる。それにしても、人々がやはり、ただ記憶だけで正確に比色や色彩の命名ができる、と主張する。]††

5. 権威が権威に対するコメント

Ridgwayの色名が代表する色彩に対して、MaerzとPaulも、いちいち厳しく検討している、その例は数えきれないほどであるが、その厳しさを理解するために、二、三の例を挙げる。

[本当の明度から見ると、RidgwayのApple Greenは、やはり輝かし過ぎる。無数の見本が示しているように、この色の一般的な見方では、疑いなく一種のもっと柔らかい色である。今日では、平均して4.5GY6.4/5.4†††と見積り、普通の緑の林檎と等色している。]†††そしてRidgwayの本来の色は、5.9GY6.6/5.8であり、両者のD. Nikersonの退色指数は5.5である。

[RidgwayとTCCA††††とも、Carrot Redを提供している、……しかし、両方ともトーンにおいてピンクみを呈しすぎる。……大量の多種多様なにんじんを調査した結果が示したように、実際に、『色彩目録』にある色彩が実物と等色している。]

[Ridgwayのチョコレートは……。もし、調味料の混らない自然なチョコレートのいずれか一つと比色すれば、トーンにおいて紫味赤を呈しすぎることを示

* * * 参考文献4)の140ページ、つまり、色名が指示する(to designate)あるいは、同一なものとみなす(to identify)色である。

* * * * 参考文献3)の10ページ。

* * * * * 参考文献4)の137ページ左欄。

* * * * * 参考文献4)の137ページ右欄。

† 参考文献4)の143ページ左欄。

†† 参考文献4)の143ページ右欄。

††† MaerzとPaulのデータは19J6としか書かないが、ここは筆者がMinolta光電色彩計で測定した結果である。

†††† ここから引用した四つの例は、参考文献4)の149~170ページ。

††††† The Seasonal Cards of Textile Color Card Association.

表2. 英文の「色の標準と命名法」と「色彩辞典」との主な重なる色名とその代表色の相違一覧表

色名	色の標準と命名法	色彩辞典	退色指数	色名	色の標準と命名法	色彩辞典	退色指数
Sea Green	0.2B4.4/3.1	3.9GY6.5/6	69.2	Raw Sienna	0.1Y5.3/7.9	9.8YR5/5.4	10.1
Amethyst Violet	3.9P3.3/13.8	0.3RP3.9/4.5	54.9	Old Rose	5.7R5.4/7.7	4.9R5.4/5.1	9.8
Walnut Brown	0.9YR3.9/3.2	0.6Y6.1/4.2	30.6	Lincoln Green	3.2GY3.9/1.8	1.5GY4.8/2.7	9.6
Yale Blue	3.4PB6.3/5.1	9.6PB3.7/5.3	29.1	Terra Cotta	2.2YR5/5.9	3.6YR5.1/7.6	9.5
Magenta	3.3RP4.1/8.4	0.1R4.3/8.9	26.2	Chestnut	4YR3.2/4.2	4.1YR4/2.8	9.1
Burnt Umber	7.1R3.2/2.4	7.1YR4.4/3.8	23.8	Cornflower Blue	8.5PB4.8/8.9	9.3PB4.8/6.8	8.8
Wistaria Blue	9.2PB5.5/8.1	4.6P5.7/5.5	23.7	Old Gold	4.3Y5.5/5.5	4.6Y5/3.8	8.7
Lilac	7.5P6.2/6.2	0.9RP7.4/2.9	23.3	Delft Blue	3.6PB3.9/3.8	7.5PB3.7/3.2	8.5
Emerald Green	0.1G6.8/6.9	5.7G5.9/6.3	22	Lavender	1.2RP7.1/1.8	1.7RP6.2/2.6	8.2
Marine Blue	2.2PB3.2/5.5	0.7P3.1/3.8	21.5	Sulphur Yellow	1GY8.6/4.3	8Y8.1/7.2	7.9
Wedgewood Blue	8.3PB7.5/2.7	5.3PB4.9/2	20.5	Barium Yellow	7.9Y8.2/5.7	5.2Y8/5.8	7.7
Citrine	6.1Y6.2/6.5	4.2Y4.8/3.8	20.4	Madder Brown	7.2R3.3/4.4	8.7R3.8/3.7	7.5
Lemon Yellow	8Y8.3/9.8	4.9Y7.7/8	20	Myrtle Green	3.5B3.1/3.4	2B3.6/2.6	7.2
Pea Green	9.6GY5.6/1.7	4.5GY6.1/4.1	16.1	Malachite Green	9.5GY6.1/3.8	1.8G5.7/3.5	6.7
Vandyke Brown	10R3.1/2.1	6.9YR4.1/3	15.7	Auburn	4.6YR3.4/3.4	5.7YR4/3	6.2
Cadmium Yellow	0.7Y6.4/10.1	8.7YR7.4/9.7	15.1	Burnt Siena	3.8YR3.7/5.8	3.6YR4.5/5.5	6.2
Maroon	8.8R2.6/3.3	5.1R3.5/4.6	15.1	Cadmium Orange	6.1YR6.3/11.2	6YR7/10.7	6.1
Grass Green	5.9GY4.5/3	1.9GY5.3/4.4	15	Sky Blue	1.5PB6.9/4.2	4.1PB6.8/4.5	6
Pistachio Green	1G5.3/2.7	6.5GY6.3/3.6	14.4	Pearl Gray	3.5GY7.1/0.3	5.2Y6.9/1.1	5.9
Slate Color	7.3PB2.9/0.8	3.7RP4/1.2	14.4	Drab	7.8YR4.7/2	0.5Y5.1/2.3	5.6
Scarlet	1.2YR5.1/11.2	9R5.3/11.9	13.5	Apple Green	5.9GY6.6/5.8	4.5GY6.4/5.4	5.5
Olive Green	9.5Y3.8/2.6	5.8Y4.8/3.5	13.2	Ivory Yellow	4.2Y8/2.5	1.8Y8.1/3.2	5.4
Navy Blue	8.9PB3.4/3.7	6.8PB2.6/2.4	12.5	Gobelin Blue	7.3B4.2/2.8	6.4B4.7/2.4	5.1
Raw Umber	0.2Y3.3/2.8	8.8YR4.4/4.1	12.4	Honey Yellow	2.5Y6.2/6.4	3.2Y6.1/5.6	4.7
Chocolate	5.3R3/2.7	3.6YR3.4/1.9	12.3	Sepia	3.1YR3.3/1.5	6.8YR3.5/1.4	3.6
Indian Red	5.4R3.6/3.9	1YR3.7/4.6	12.2	Straw Yellow	6.1Y8.1/5.3	5.1Y8/5	3.6
Hazel	6.4YR4.6/5.4	9.9YR5.1/4.7	12.2	Chamois	1Y6.8/5.5	2.6Y6.8/5.5	3.5
Royal Purple	2.9P3.3/8	5.5P3.7/7.8	11.2	Mignonette Green	9Y5.5/3.9	8.4Y5.3/3.5	3.3
Cinnamon	7.6YR5.7/5.9	9.9YR5.9/4.5	10.2	Yellow Ochre	0.2Y6.4/7.5	0.6Y6.5/7.4	2.1

説明

- ・主な重なる色名とは、「色の標準と命名法」の1,115個と「色彩辞典」の3,467個の色名にある同じもの(451個色名)から選んだのである。選ぶ基準は「色彩辞典」にある色名リストの中の大文字で書いた重なる色名の全部である。
- ・この二冊の本が全部貸出しできないものであるから、持ち易いMinolta光電色彩計で両方を測定した。絶対値がそんなに正確ではないにしても、やはりその相違が比較できると考えられる。そして、1912年出版した「色の標準と命名法」の保存状態はかなり良好である。
- ・退色指数はD. Nickersonの公式によって計算する。そして、この表は退色指数の順番によって作る。比較的に言うと、この表の退色指数は表3の中国名より低い。
- ・Flesh Pink, Orangeなど6個の色名は「色彩辞典」の中には、代表色がついてない。色名だけがのこっている。理由は、それらの色名が一般色名(generic term)であり、あるいはよい比色はまだ出てこないなどからである。それらが「色彩辞典」に大文字で書かれたが、この表には除名する。
- ・一番目のSea Greenはなぜか退色指数が高いのかについて、「色彩辞典」は「色の標準と命名法」に対して、その色が「Sea Blueと言った方がいい」と述べている。

す。」

「用心深く大量のレモンの色と比色してから、Ridgwayのレモンイエローは過度に清く、輝かしいことが知られている……。」

MaerzとPaulが厳しくコメントすると共に、Ridgwayに同感した所も少なくない。例えば、「Ridgwayが矢車菊(Cornflower)に与えた色は9.3PB4.8/6.8、これは大量の実物の矢車菊と比色

してチェックしたから、正確であることが明らかである。」そして、Ridgwayが顔料名と色名とを混用しないようにと言う主張に対しても、大賛成である。なぜならば、例えばプルシャンブルーは本来、顔料名であり、それがもっとも濃い時には、黒色に近い。少し白色で薄めれば、紫っぽくなる。そして、更に薄めれば、また緑味になる。そうすると、もし、この顔料がもたらす色を、全部プルシャンブルーといえ、大きな混乱を招くであろう。そこで、Ridgwayは、用心深く、これらの色を別々に名付けた。例えば代表的な色はプルシャンブルーと言っても、ほかにベルリン

ブルー（中国語で言うと、柏林藍）、パリブルー、ホルテンスブルー（Hortense Blue）などと名付けている。

それは、両者の著作にある色名の代表色が互いに似ている原因の一つであるが、実際に、両者の色名の代表色には、一つの共通点が存在している。即ち、実物に対する比色である。そして、裏付けのためかのように、両者とも「色彩目録」を、極めて重要視しており、参照している。MaerzとPaulは、何度も、「Ridgwayが“色彩目録”をその色名の主要な出典としている」ことを述べている。¹¹¹¹¹¹そして、「色彩辞典」

表3. 「中国色名総覧」と「中国の伝統色」の重なる色名とその代表色の相違一覧表

色名とその説明		中国色名 総覧	中国の 伝統色	退色 指数	色名とその説明		中国色名 総覧	中国の 伝統色	退色 指数
孔雀藍	くじゃくの藍	5B6/7	7.7PB3.4/13.3	86.1	鈷 藍	コバルトブルー	7.5B6.5/8	0.7PB6/4.6	21.3
灰 緑	灰色がかった緑	5Y5.5/7.5	6.7BG5.7/2.7	80.3	橄欖灰	オリーブグレイ	5Y5/2	2.1G6.2/1.8	20.8
毛 緑	水性顔料の緑	2.5G8/6	3B3.8/3.6	71.8	淡灰緑	薄いグレイがかった緑	10GY5/2	3.7G7.7/1.7	19.8
銀鼠灰	白りすの灰色	2.5Y7/3	7.2PB5.9/1.2	57.9	鉄 灰	鉄の灰色	5Y5.5/0.6	1.4G7.9/0.7	19
宝石藍	宝石の藍	2.5PB6/7	8.3PB3.2/12.4	55.5	榴花紅	ざくろの花の赤	7.5R6.1/13.5	6.3R5.2/11.3	18
玫瑰紅	ばらの紅	2.5RP5/11.4	1.6R3.9/8.7	51.3	土 黄	黄土色	2.5Y6.5/6	9.4YR6.5/8	14.7
品 紅	フクシン(染料)の赤	2.5R5.4/11.5	5.1RP4/13	49.2	銀 白	銀の白	7.5P9/0.5	3.5Y9/1.2	14.3
牽牛紫	あさがおの紫	7.5P3.5/7	3.2RP4/12.8	43	茄皮紫	なすの皮の紫	10RP3/5	7.6RP3.6/2.7	14.2
玫瑰灰	ばら色がかった灰色	2.5YR4.1/3	5.3RP3.8/6.1	42.4	咖 啡	コーヒー色	5YR4.4/3.6	7.5R4/3	14.1
銅 緑	ろくしょう(緑青)	10G6.5/7	7.4GY7.2/2.6	41.6	蒼 緑	深緑	2.5BG4.5/2	8.5GY4.2/2.1	13.9
鸚鵡緑	おうむの緑	7.5GY6.5/11	3.2G5.2/7.4	39.6	灰 藍	灰色がかった藍	10BG4/2	3.4B5.4/2.6	13.3
翠 緑	青緑	7.5G6/9	1.3BG3.9/5.6	33.9	金 黄	橙色	5YR6.5/10.8	4.9YR5.8/7.9	13.3
鴿 灰	鳩の灰色	5GY5/0.5	7.1B6.9/2.1	32.9	橄欖緑	オリーブグリーン	10Y4/6	9.6Y4.4/3.2	11.5
艶 紅	鮮やかな赤	2.5R6.5/9	5.4R4.9/12.5	32.6	鴨蛋青	卵の薄青	10B9/0.5	6G8.8/1.2	11.5
巴黎緑	花緑青の色	10GY6.8/6	5.7G6.3/9.1	29.5	油 緑	竹の幹の緑	2.5G4.1/3.5	3.6G3.8/1.2	9.7
殷 紅	黒がかった赤	7.5R3.5/7	1.6R4.3/8.7	28.4	草 黄	薄黄緑	7.5Y7.3/7	7.7Y8.1/7.6	7.2
銀 朱	辰砂の朱	7.5R5.5/13.5	4.4R5.4/9.7	26.4	青 灰	こんねず	5PB4.1/2.2	3.3PB4/0.6	6.4
葱 緑	もえぎ色	5G6.5/7	7.8GY7.4/6.6	26.2	乳 白	乳汁の白	2.5Y9.5/1.5	1.9Y8.9/1.9	5.2
姜 黄	しょうがの黄	7.5Y8/8	3.5Y6.3/6.7	25.9	月 白	薄灰緑	5BG9/0.5	9.8G8.8/0.9	3.9
石板灰	スレートの灰色	5YR5.6/0.5	0.1B5.4/1.8	25.8	浅駝色	薄らくだ色	10YR8/3	9.9YR7.5/2.9	3.4
赭 石	代赭色	7.5R3.5/6	1.7YR6/6	25.1	棗 紅	なつめの色	2.5R3.5/7	2.2R3.6/7.1	1.8
月季紅	ばらの赤	7.5R4.5/10	3.9R4.4/12.5	24.3	群 青	ぐんじょう		7PB3.5/10.7	
檸檬黄	レモンイエロー	2.5Y8.6/8	7.9Y8.5/9.1	22.4	芦 灰	芦の灰色		4.3GY7.1/2.3	
雄 黄	石黄の色	2.5YR7.5/11.1	4.2YR6.1/8.7	22.3	深 灰	こい灰色	N4.3	1B4.5/1.1	
藤 黄	しおうの色	5Y8.6/12	6.3Y8.7/6.5	21.9	鉛 灰	鉛の灰色	N7	9.1B3.8/1.4	

説 明

- ・重なる色名とは、「中国色名総覧」の625個と「中国の伝統色」の320個の色名にある同じものである。
- ・「中国色名総覧」にある色名の代表色のデータは湊幸衛氏による測定であり、「中国の伝統色」のデータは筆者がMacbeth2020*分光色彩計による測定である。
- ・退色指数はD. Nickersonの公式によって計算する、そして、退色指数の順番によって色名を並べる。
- ・群青と芦灰の二つの色名は「中国色名総覧」の中には、データが抜けて、色名だけがのこっているから、計算できない。「総覧」の種となる「色譜」は日本国会図書館にあるが、変退色の疑いがあるので、測定し直さない。
- ・日本色研の福田邦夫氏によると、「中国の伝統色」の原著者が日本に訪れた時に、北京を中心に研究を展開されたこれらの色名と色彩が南地域の人々にあまり受け入れられていないらしいと言っている。南地域にいる漢民族の一人の筆者としても、ある程度には、同感である。

111111参考文献4)の150, 161, 164, 175, 176ページ。

も、出来るだけ、この英語色名をも収録したフランスの著作を参照にしている。

6. 普遍性のある色名セットのためには

これに対して、「色譜」と「中国の伝統色」とにある同じ色名の代表色が、しばしばずれており、互いに矛盾しているものさえある。つまり、その退色指数が80を越えたものさえある(表3参照)、同じ色名であるのに、その代表色が互いに、まったく別な色になっている。

その原因は、やはり代表色を選定する方法にあるであろう。「色譜」にある色の選定は委員たちの会議によって決定された。「中国の伝統色」は、その選定が画家の王定理とデザイナーの王崑との両氏によって行われたが、その大半が、「この数年来収集し、手づくりで復元したものである。」その収集や比色する対象は古代の壁画と錦織であり、つまり、非常に専門的な範囲の中で、その選定の基準を立てている訳で、「色譜」の科学者たちによる選定と食い違うのは当然であると考えられる。

色名の代表色と同じ基準によって、普遍性のある色彩を選定するためには、幅広く各領域の資料を参照することが必要である。そうすると、同じ色名の代表色にしても、絵画や織物に適用できると共に、陶磁器や建築にも当てはまる。そして、美術だけでなく、生物学や鉱物学などの科学研究はもとより、日常生活にも実用性を持つこととなる。

資料の参照だけでなく、もし、その代表色を合理的に追求しようとする、「色彩目録」や「色彩辞典」のように、色名に因む実物に正確に比色や測色することが必要であろう。そして、権威者の資料の間に、もし矛盾したことがあれば、この方法は問題の解決の手掛りともなるであろう。

7. 結論

最後に、色名そのものの選定に普遍性を要求するならば、これも幅広く資料や文献を参照しなければならない、例えば「色彩辞典」のように、それは265種類ほどの文献、雑誌を参照した。それらは、大量の色名の収集、色名の意味の解明、同意義の色名の分別、色名の由来の探求などのためである。それによって、大量の色名が収集できると共に、各色名が使われる頻度をも知ることが可能であろう。

そして、口述色名も調査すべきであろう、その方法

論として、心理言語学、神経生物学の学者E. H. レネバークの方法に従って、正確なサンプリングにより、調査する相手に、「彼らが色名として思い浮かぶ限りの単語を全部書き出してもらおう。」⁵⁾という方法が考えられる。そして、統計処理した結果によって、現時点にある色名の使用状態を知ることが可能であると共に、色名の使用頻度をも徹底的に明らかにできる。つまり、一つの色名は人々に書き出してもらおうパーセンテージが高いほど、その使用頻度も高くなる。そして、どの国でもそのある限りの色名の中から300位の常用的な色名を選び出したい場合は、こう言う文献においても、口述においても、使われる頻度の高い色名をまず注目すべきであろう。そうすると、学者たちによって選定された色名セットの間に、重なる同じ色名がかなり多くなるであろう。そして、「色譜」と「中国の伝統色」との間にあるような、厄介な問題が起こらないと考えられる。

参考文献

- カラプランニングセンター編集, 湊幸衛監修: 「中国色名綜覧」, カラプランニングセンター (1977) 29-42。
- 王定理, GE企画センター: 「中国の伝統色」, 大日本インキ化学 (1986)。
- R. Ridgway: Color Standards and Color Nomenclature, Washington D. C. (1912) 29-40。
- A. Maerz & M. R. Paul: A Dictionary of Color, McGraw-Hill Book Co., Inc. (1950) 188-206。
- 福田邦夫: 「赤橙黄緑青藍紫」, 青娥書房 (1986) 38。

(受付: 1991年10月9日)

著者紹介



呂 清夫

1942年9月20日生

筑波大学芸術研究科, 構成専攻,

1980年修士課程修了

国立台湾師範大学工芸教育学系及

び大学院助教授

日本色彩学会会員

芸術学修士

1985年9月から一年間, 筑波大学客員研究員